

ヤクザルがいる島



総務部 主事 伊藤 尚美
業務部 主事 長張 由紀

東京ではコートが脱ぎたくなるような陽気が続いていた3月中旬、屋久島に向かった。

林芙美子の小説「浮雲」にあるように、「月に35日雨の降る島」で有名である。その名に恥じず、到着した日は雨、帰りの日も大雨だった。しかし目を見張るばかりの自然が息づく島である。周囲約130kmのほぼ円形に近い小島。島の中央部には九州最高峰の宮之浦岳（1,935m）をはじめ、1,800m以上の高峰が連なり「洋上アルプス」の異名を持つ。また、島を取り囲む暖かい黒潮から水蒸気が発生し、それらが高峰を上昇気流となってかけ登り、年間10,000mmもの雨を降らせる。海拔0m～2,000mまで標高差があるため、亜熱帯種から亜寒帯種まで多種多様、約1,500種もの植物を育てている。

また山の麓は珊瑚礁、頂上は雪山と言われるように、我々が紀元杉を見に行った時は、みぞれが降っていた。寒さに凍えながら写真に収めた。



紀元杉 - 樹齢3,000年、幹周13.5mの一本杉

屋久島というと屋久杉が有名である。島は隆起した花崗岩によって出来ているため、表面は1mにも満たない薄い土の層で覆われているだけである。それを植物が根を張って支えている状態の厳しい自然環境のため、樹の生長は非常に遅くなり、その分年輪が密になり腐りにくく長生きする。従って、杉の平均500年の寿命をはるかに上回る1,000年～3,000年級の巨大な屋久杉に生長する。みぞれが降りしきる中、紀元杉を見ながら、恐らくどんなに頑張ってもあと100年も生きないであろう我々から見ると、水滴をたっぷりふくんだ深く、透明な光を放つ緑の苔むした老巨木がそこいらじゅうにある光景は、なにか神聖な浄化された聖域に迷い込んだような、どこか懐かしいような不思議な気がした。

島には至る所に山間を縫って走る清流があり、遠くに近くに絶えず水音が響いている。日本の滝100選の一つでもある大川の滝は屋久島の中でも最大級。落差88m、幅22mという規模は南九州一の大きさである。大きな轟音をたて激しく水が流れ落ち、数10m離れた所まで豪快な水しぶきを飛散している。とてもではないが滝壺近くには近寄れない。

また、鯛ノ川の中流にある千尋の滝は巨大な一枚の花崗

岩と滝の組み合わせがダイナミックである。落差60mの二段の滝も、巨大な岩のために小さく見える程である。



大川の滝



千尋の滝

また、宮之浦川の支流、白谷川の清流である白谷雲水峡では、重なり合った巨岩、切り立った溪谷等が見られ、屋久杉など原生林を容易に観賞できる。しかし我々が訪れた時は大雨。静かというよりは豪快な清流であった。



白谷雲水峡

屋久島の気候は変わりやすく、一旦雲が切れるとみるうちに青空が広がり緑はつややかに輝きだし、生長を始める。こんなにも沢山の種類の緑色があったのかと改めて実感した。運よく、ちょうどその晴れ間に西部林道にさしかかった。ここは屋久島で最も美しい照葉樹林が見られる場所。世界文化遺産に指定されている区域でもある。細い断崖のくねくね道が続き道幅が狭い。我々が通った時は、車一台、人一人すれ違うことなく、出会ったのはヤクザルだけだった。発見したとたん嬉しく、思わずカメラのシャッターを押してしまったが、歯を剥いて怒られてしまった。美しい自然とは時に恐ろしく、熾烈な生存競争や厳しい自然環境を勝ち抜いてきたその生命力を含めての姿が本当の自然なのだとか強く実感した屋久島めぐりでもあった。

風の強い横殴りの雨にはほとんど困ったが、地元の人達はこの時期の雨を「木の芽流し」という美しい名で呼び、上手につきあっている。屋久島を出る日は天候悪化のため船も飛行機も欠航し、予定より2日も長く滞在することになり途方にくれてしまったが、美しい森を育てているのはこの雨である。屋久島は、我々に変化に富んだ大自然のドラマを見せてくれたのである。